

小学校家庭科・住生活学習における住まい方ガイダンス授業実践の試み

山下 綾子 埼玉県狭山市立狭山台小学校
亀崎 美苗 埼玉大学教育学部

キーワード：感覚マーク、住まい方カード、住生活学習、小学校家庭科

1. はじめに

住まいと地域およびそこでの住まい方に関わる学習は広く住教育¹⁾として捉えられ、家庭・学校・社会教育において学習する機会があるとされ、学校教育においては小学校5年生から家庭科の住居（住生活）領域で系統的な学習が始まる。平成元年度以降の家庭科男女共修により中学校・高等学校においても全員が家庭科を履修し、住生活学習もそこに含まれるが、学習内容の体系的な構成について学習指導要領及び教科書等では明記されていない。関川ら（2015）は、その内容構成の検討において、小学校段階の学習では、本来住生活の前提条件として確認されて然るべき住宅そのものに対する概念、すなわち住まいに求められる条件について触れられていないことを指摘している²⁾。ここでは住まいに求められる条件は、住宅が生きるために必要であるとする住宅の「必然性」、生活を営み安全・快適・健康性をも含む「個別性」および景観形成を伴う社会的財として住宅のもつ「社会性」により構成されるとし、さらに、学習内容を住宅の概念と生活行為とに分けて考えその関連性を質的に分析すると、小学校段階では取り扱われているカテゴリが少なく、住生活行為のうち利用と管理に関わる制御面でのアプローチに偏っており、住宅そのものに対して触れる機会に限られる点が明らかとなっている。本来であれば「住居領域の学習内容は住宅の概念を基礎として、具体的な住生活行為とそれを制御するルールを学習する系統的な構造を持っている。」とされているのにもかかわらず、小学校でこのような現状が確認されることは住教育の初めの段階にとって心許ない状況と言わざるを得ない。

一方、平成29年3月に公示された小学校学習指導要領³⁾では、B衣食住の生活（6）快適な住まい方アにおいて、（ア）住まいの主な働きが分かり、季節の変化に合わせた生活の大切さや住まい方について理解することと表記され、現行版（平成20年告示）の内容に新たに加わる形で住まいの機能そのものに触れることが明示されている。また、（6）イでは、「季節の変化に合わせた住まい方、整理・整頓や清掃の仕方を考え、快適な住まい方を工夫すること。」との表現で、住まい方に関わる問題解決的な学習を重視し、思考力・判断力・表現力等を養うことが目指されている。このように、今回の改訂により、新たに住宅の概念を捉え、住まい方を理解し工夫することが求められることとなった。本研究は、小学校家庭科の住生活学習の最初にガイダンス的な位置付けで住まいそのものを意識できるような教材提示を行い、これまでの授業では手薄であった住宅の概念を児童に想起させることにより、その後続く住生活行為に関わる内容に対する学習動機の高まり、住まいに対する興味・関心へとつなげることを目的として授業実践を試みた。具体的な授業実践の内容を以下に示し、授業における児童の反応およびワークシートへの記述内容より、その効果等について分析・考察を行った。なお、今回の授業実践は先駆的な試みであり、実践後の報告としては希少なものと思われる。

2. 授業の実際

2-1 これまでの実践から

小学校第5学年から始まる家庭科において、児童は毎日当たり前に行われている「住む」ことについて初めて学ぶことになる。学習の内容は学習指導要領解説・家庭編⁴⁾にあるように「内容C 快適な衣服と住まい方 (2) 快適な住まい方」について「ア 住まい方への関心、整理・整頓及び清掃の仕方と工夫」「イ 季節の変化に合わせた生活の大切さ、快適な住まい方の工夫」である。これまでの実践において、児童にとって「住まい方」は実態として捉えにくく、実践者にはこれまで児童が自分自身と関わらせて学習していると感じられることは多くはなかった。この課題の背景として、児童が他者の住生活を詳しく知る機会はほとんどなく、その知識は自分の家庭の住生活に関するものに限られることも関連していると考えられる。したがって本実践では、児童が多様な住まいや住まい方に気付く学習活動を通して「住まい方」に関する視点を広げ、当たり前と感じていた自分の家庭の「住まい方」を捉え直すことができるようにする。この学習によって児童は生活の場としての住まいの在り方を改めて捉え、学習に取り組むものとする。

2-2 学習対象者及び指導内容

授業は、埼玉県S市の公立小学校第5学年の児童2クラス（男子26名、女41名、計67名）を対象に2016年5月に行った。学習指導要領解説・家庭編より内容C「快適な衣服と住まい」について、題材名を「かたづけよう 身のまわり」とし3時間扱いで実施した。

1時間目は「住まい方」を児童が意識し、「住まい方」に関心がもてるようにした。住まいを自分や自分の家族のこととして考える学習活動をするこの時間は住居学習のガイダンス的な役割をもつものといえる。2時間目は1時間目の学習から、居心地が良い住まい方の必要条件として住まいの整理・整頓があることを理解したことをもとに、整理・整頓の仕方を考える時間とした。学校生活を快適に過ごすためという課題のもと、引き出しの中を整理・整頓することとした。この学習をもとに家庭生活とのつながりを視野に入れて、家庭での整理・整頓実践を課題とすることをあらかじめ伝えて活動するようにした。3時間目は各自が家庭で行った整理・整頓実践を伝え合い、整理・整頓の効果的な方法について考えるとともに、その過程で出た不用品についてそれらを軽減する方法と活かす方法について考えることとした。

各時間の学習目標を表1に示す。なお本稿では、住居学習のガイダンス的な役割ともつと考える第1時について詳述する。

2-3 指導のポイント

第1時の指導のポイントは以下2点である。

1つ目は、児童が「快適」を具体的に考えるために、住まいのお気に入りの場所探しにおいて「感覚マーク」を活用することである。学習指導要領解説・家庭編においても住領域の学習について「C 快適な衣服と住まい (2) 快適な住まい方」と示されているように、「快適」がキーワードとなっている。児童は生活の中で「快適」を感じているもののそれを適切に言語化することが難しい場合も少なくなく、快適を児童が実感をもって理解するための手段が必要である。そこで、どのようなことが自分や家族にとって気持ちが良い住まい方なのか、すなわち「快適」なのかを考えるに

表1 「かたづけよう 身のまわり」各時間の学習目標

時間	学習目標
1	○お気に入りの住まいの場所探しや住まい方カード選びを通して、快適な住まいおよび住まい方について考え、関心をもつことができる。
2	○学校生活を快適に過ごせるにはどのようなようになっていたらよいか考えて、引き出しの中を整理・整頓することができる。
家庭実践：各家庭において、整理・整頓し、その活動を報告するレポートを作成する。	
3	○家庭実践の様子を伝えあい、住まいを整理・整頓する方法がわかる。 ○不用品を軽減する方法と不用品の活かし方がわかる。

あたって「感覚マーク」を用いて児童の表現を補うこととした。「感覚マーク」は学習プログラム集⁵⁾を参考に、心で感じることをハートの形、肌で触って感じることを手の形、目で見えて感じることを目の形、鼻で嗅いで感じることを鼻の形、耳で聴いて感じることを耳の形、それ以外のものは自分でマークとして作ってもよいとして児童に示した。

2つ目は、多様な住まい方を知るための「住まい方カード」を用いた学習展開である。先述のように児童は自分の家の住まい方以外の住まい方について多くは知らないと推測される。そこで、住まい方に特色が表れている部屋の写真を筆者らが選びカードにした。カードの写真を見ることを通して、自分が写真の部屋で生活したらと児童が自らを投影しながら学習することができると考えた。「住まい方カード」は和室が6枚、洋室が5枚、子ども部屋が9枚の全20枚から成る。写真はA4サイズに2枚印刷できる大きさにし、ラミネートフィルムでコーティングした。それを学習グループ(5人ずつ8班編成)ごとに1セット(20枚)渡せるように用意した。各グループにカードが20枚あることで、児童一人ひとりの手元に複数のカードが行き渡ると考えた。

2-4 本時の学習活動と児童の学びの様子

【学習過程1 導入】

まず初めに、教師が絵本「ねずみのいえさがし」⁶⁾を読み聞かせた。この絵本は、ねずみ自身にとって快適な住まいを探す様子が写真と言葉によって示されている。絵本を読み終えて、ねずみにとって快適な住まいとは何であったのかを児童に尋ね、では児童自身にとって快適な住まいとは何かを考えるように「みんなにとって、家とはどんなものだろう」と尋ねた。そして学習課題「家の中で気に入っていることについて考えよう」を提示した。

【学習過程2 展開①】「家の中で気に入っている場所とその理由を考える」

学習課題を受け、児童に自分の家の中で気に入っている場所を探しその理由とともにワークシートに記入するよう指示した。気に入っている理由を考える際、「心で感じること」「肌で触って感じること」「目で見えて感じること」「鼻で嗅いで感じること」「耳で聴いて感じること」があるのではないかと尋ね、それを簡単な絵にした「感覚マーク」を示し、理由とともに記入するよう指示した。

児童の記述を集計した結果、家の中で気に入っている場所の平均記述数は2.2か所であり、最も多く記述した児童は6か所であった。表2は、気に入っている場所として1番目に記述されたものと出現数、その理由と感覚マークを示したものである。なお、感覚マークは複数選んでよいこととした。

家の中で気に入っている場所として最も多く挙げたのは、ごはんを食べる部屋、こたつのある部屋、テレビの部屋も含めた「リビング」(出現数21)、次いでベッド、ふとんも含めた「寝室」(出現数18)であった。「リビング」につけられた感覚マークでは心マークが最も多く、理由の記述には「落ち着く」「みんながいる」などがあげられていた。「寝室」につけられた感覚マークでは肌で触れるマークが最も多く、理由の記述にも「気持ちがいい」「ふわふわで落ち着く」などがあげられていた。

図1は、「リビング」と「寝室」につけられた感覚マークの割合を示したものである。この2つは出現数の差は小さいが、付けられた感覚マークには違いがみられる。このことから、児童は気に入りの場所を選ぶにあたって、その理由をじっくり見つめて考えていることが推察される。

3番目に多く挙げた場所は「自分の部屋」(出現数8)であり、つけられた感覚マークは心マークが最も多かった。理由には「居心地がよい」とあり、何をしているときかという問いにも「ゲーム」「読書」「勉強」「寝ているとき」など多様な行為が挙げられていた。

4番目は「ソファ」「ベランダ」(出現数 各3)であった。「ソファ」につけられた感覚マークは、肌で触れるマークで「ふかふかして落ち着く」などの理由が述べられていた。「ベランダ」に共通してつけられた感覚マークは心マークで「景色が時間によって変わるから」などの理由が述べられていた。

5番目は「お風呂」「押入れ」「和室」(出現数 各2)であった。この3つに共通してつけられた感覚マークは、心マークと手で触れるマークである。

6番目は「お父さんの部屋」「姉の部屋」「北の部屋」「隣の部屋」「屋根裏」「トイレ」「庭」「階段」(出現数 各1)であった。これらは、何をしているときかという問いに対して具体的な行為が示されている。たとえば、「庭」を選んだ児童は、何をしているときかに対し「鯉にえさをあげているとき」といった具合である。それに伴って感覚マークも多様につけられていたが、中でも多かったのは肌で触れるマークであった。

図2、3は、家の中の気に入っているところ探しでつけられた感覚マークについてマークごとに総数と、その割合を示したものである。感覚マークの中では「心で感じるマーク」の出現数が最も多く、全体の約半数を占めていることが明らかとなった。

以上のことから感覚マークの活用は、言語で表現することが苦手な児童が思考を表す補助ツールとして有効であると考えられる。このことは、ワークシートに言語による記述は少ないが、感覚マー

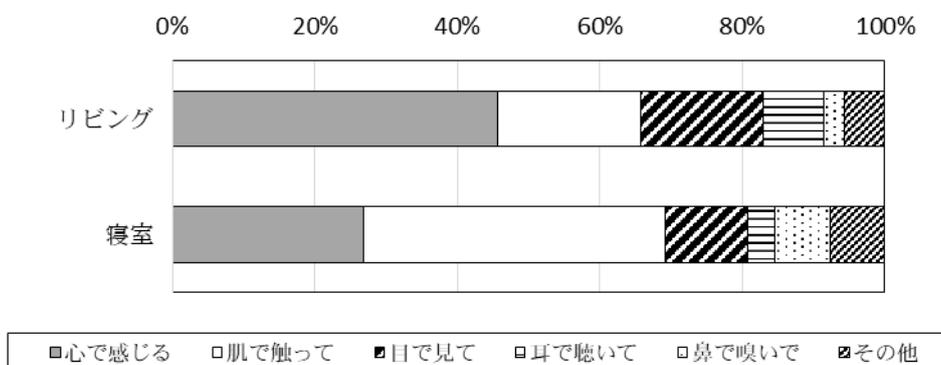


図1 「リビング」と「寝室」につけられた感覚マークの割合

表2 気に入っている場所として1番目に挙げられたものとその理由

場所	出現数	感覚マーク	何をしているとき	なぜか
・リビング ・ご飯を食べる部屋 ・こたつのある部屋 ・テレビの部屋	17 1 1 2	心16 触 7 目 6 耳 3 鼻 1 他 2	・テレビ鑑賞 ・食事中 ・ゲーム ・横になっているとき	・みんないるから ・落ち着く・楽しい ・居心地が良い ・暖かい・明るい ・気持ちいい ・いろいろなゲームができるから
・寝室 ・ベッド ・ふとん	8 9 1	心 7 触11 目 3 耳 1 鼻 2 他 2	・睡眠・昼寝 ・睡眠・ぼーっとしているとき ・動画をみるとき寝るとき	・においがいい ・涼しい ・気持ちがいい ・日ざしがあたって暖かい ・わくわくする ・気持ちいい
自分の部屋	8	心 7 触 2 耳 1	・睡眠・遊ぶ・読書・いろいろ ・ゲーム・宿題・読書	・風通しがいい・落ち着く ・楽しい・居心地がいい ・マットがふわふわ
ソファ	3	触 3	・音楽鑑賞 ・座っているとき	・クッションの安心感 ・リラックス ・柔らかい ・ふかふかしていて落ち着く
ベランダ	3	心 3 目 2 他 1	・景色を見ているとき ・ベンチで横になるとき ・いすに座っているとき	・景色が時間によって変わるから ・暖かい ・落ち着く ・風が気持ちいい
お風呂	2	心 1 触 1	・お風呂にはいつているとき	・気持ちが良い
押し入れ	2	心 1 触 1 目 1 耳 1 鼻 1 他 1	・ひまなとき ・くつろいでいるとき	・暗くてせまい ・落ち着く
和室	2	心 1 触 1 目 1	・昼寝 ・テレビを見ているとき	・寝ることが好き ・和風な感じ
お父さんの部屋	1	触 1 耳 1	・読書・音楽鑑賞	・静か ・くつろぐ・和な感じ
姉の部屋	1	耳 1	・ドラムをたたくとき	・ピアノの音がきれい
屋根裏	1	他 1	・考え事	・人がいない・静か
トイレ	1	鼻 1	・しているとき	・気持ちいい
庭	1	心 1	・鯉にえさをあげているとき	・鯉の種類が多いから
北の部屋	1	目 1 耳 1	・読書・勉強	・静か
隣の部屋	1	他 1	・涼んでいたいとき	・風が涼しい
階段	1	他 1	・暑いとき	・涼しい

※感覚マークは「心：心で感じる」「触：肌で触って感じる」「目：目で見えて感じる」「鼻：鼻でかいで感じる」「耳：耳で聴いて感じる」「他：その他」として示した。

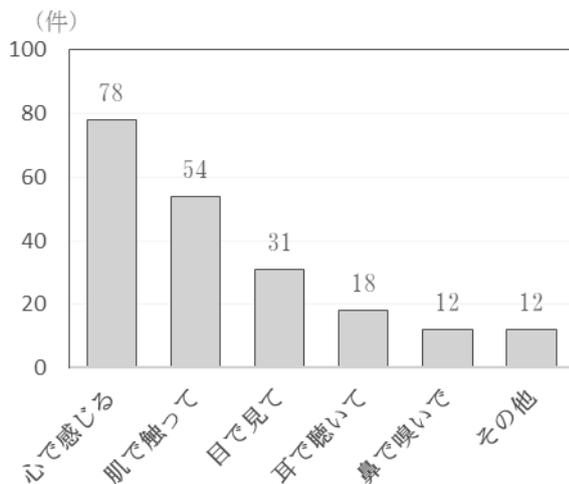


図2 感覚マークの出現数

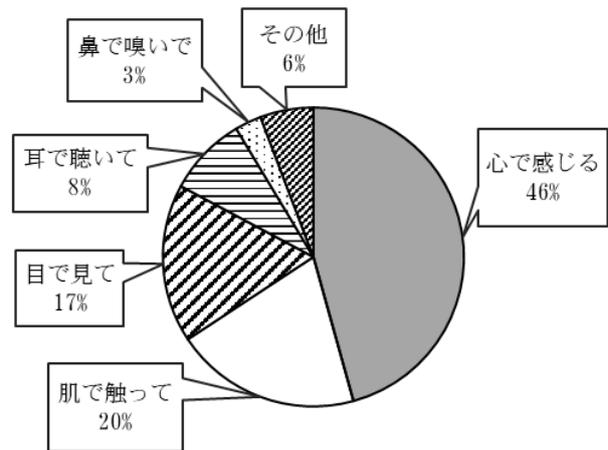


図3 感覚マークの出現割合

クがたくさんついている児童がいることから明らかである。感覚マークによる表現をきっかけとして、教師は言語化が苦手な児童が思考を深めていけるよう発問を工夫し、住まいにおける快適の理解の促進を図ることが可能になると考える。

【学習過程3 展開②】『「住まい方カード」から自分の好きなカードを選び、その理由を考える』

展開②では、展開①のお気に入りの場所探して友達の家のことについて聞いたことをもとに、よその家に行ったときに自分の家と違うと感じた経験はないかと尋ねた。児童は口々に「ある、ある。」と答え、そこから各家庭による住まい方の違いに意識が向くようにした。そして特徴のある部屋の写真を示した「住まい方カード」を児童に提示した。カードは1枚ずつバラバラにして見比べることができ、1人の児童が数枚ずつ手元で見ることができる。「住まい方カード」のカード番号と写真の内容はランダムである。児童が20枚の「住まい方カード」を見比べた後、その中から気に入ったカードを選びその番号と理由をワークシートに記入するよう指示した。児童が選んだカードの平均枚数は3.3枚で、最も多くカードを選んだ児童は9枚であった。表3は、選択数の多かった順に選択理由を示したものである。

選択数が最も多かったカードNo.20（選択数36）はリビング（LDK）の写真であり、左にカウンターキッチン、右に焼釜がある。壁は白を基調とし、壁近くに黒い棚がある。棚にはスパイスや食器が並んでいる。木製のいすが3台カウンター近くに、青いソファが一つ置かれている。No.20は焼釜とそれにつかうまきに着目している児童の記述が目立った。

次に選択数が多かったNo.6（選択数29）はリビングで天井が高い洋室の写真である。壁の色は白色、正面に大きな窓があり、ベランダ越しに庭の木が見える。部屋にはソファがあり、クッションがたくさんおいてある。No.6は広々した雰囲気を選択理由として挙げている児童が目立った。2枚のカードとも、壁の色が主に白色で窓から光が差し込んで明るい雰囲気がある。児童にはこれらも好きな要素として考えられたものといえる。

次に選択数の多かったNo.15（選択数22）は子供部屋である。天井が屋根の形に沿ってななめになっているところに窓があり、光が差し込んでいる。その下にベッドがあり、寝具と床に敷かれ

表3 住まい方カードの選択数と各部屋の特徴

カードNo	選択数	選択率(%)	部屋分類 (和洋、用途、特徴)		
20	36	53.7	洋室	LDK	カウンターキッチン・かまど・まき
6	29	43.3	洋室	リビング	吹抜け・大きな窓・緑豊かな屋外(借景)
15	22	32.8	洋室	子ども部屋	屋根裏部屋・斜め窓・白い内装・青色アクセント
8	21	31.3	洋室	リビング	吹抜け・白い内装・壁に多数のフレーム(額縁など)
5	18	26.9	和室	リビング	畳・ちゃぶ台・座布団・大きな窓・緑豊かな屋外
19	17	25.4	和洋室	リビング	天井に梁・白い内装・低い棚
16	17	25.4	洋室	子ども部屋	本棚・人形・白い内装・黄緑色アクセント
4	12	17.9	和室	リビング	畳・ちゃぶ台・座卓・障子・大きな窓・垣根
10	9	13.4	洋室	子ども部屋	白い内装・ラグ・本・ベッド
9	9	13.4	洋室	子ども部屋	ピンクのカーテン・水色の内装・ぬいぐるみ
3	6	9.0	和室	リビング	畳・こたつ・床の間・障子
2	6	9.0	和室	リビング	畳・ちゃぶ台・掛け軸・座布団
17	5	7.5	洋室	リビング	食器棚・食器・テーブル
11	5	7.5	洋室	子ども部屋	学習机・水色の椅子・本棚・本
7	4	6.0	洋室	子ども部屋	小さなテント・子供・おもちゃ・白い内装
1	3	4.5	和室	リビング	畳・障子・たんす・陶器
18	2	3.0	洋室	リビング	棚・ファイル・三角定規
13	1	1.5	洋室	子ども部屋	ドラムセット・人形・本
12	1	1.5	洋室	子ども部屋	黄色い内装・おもちゃ・本・写真・ぬいぐるみ
14	0	0.0	洋室	子ども部屋	学習机・棚・箱・人形

たラグは青色系で統一されており、壁には空をモチーフにした飾りがついている。児童の記述からは、屋根の形に沿った天井に親しみを感じている記述がある。また、「せまきに落ち着く」という記述から、児童は広々とした空間だけでなく、せまい空間にも居心地のよさを求めていることがわかる。

次に選択数の多かったNo.8(選択数21)は、天井が高い洋室の写真である。中央に木のテーブルセットがあり、壁には多数の絵や鏡のフレームが飾ってある。その前に食器棚があり、中央奥に二階に続く階段が斜めに見え、縦長の窓から光が差し込んでいる。壁は白色である。選択理由に「テイストがありかわいい」「木材の使用がおしゃれ」とあるように、壁の白色とテーブルの木材の色2色がうまく合っていたことが、空間のよさとして児童に感じられていることがわかる。

次いでNo.5(選択数18)、No.19(選択数17)は和風の写真である。No.5は、畳の部屋の写真である。広々としており、壁二面が木の格子の窓になっており、そこから庭の木の緑が見える。中央にちゃぶ台その周りに座布団があり、お茶のためのセットがおいてある。No.19は、板の間のリ

リビングの写真である。天井に木の太い梁が多数見え和室に近い雰囲気が感じられる。壁は白色で低い棚が中央にあるが、食器が数点飾られているのみである。棚の前のテーブルセットの上には花が飾られている。No.5の選択理由に、「広くて気持ちいい」「外の緑がいい」とあるように、広々とした空間と視界に入る緑の木々に児童は居心地のよさを感じていることがわかる。また、No.19の選択理由に、「天井が木でかわいい」とあるように、梁を強調している空間によさを感じる児童や、「物が少ない」とあるように、シンプルな空間に児童がよさを感じることも明らかとなった。

次に、児童にあまり選択されなかったカードの特徴を探ることとした。No.14（選択数0）は、子ども部屋の写真である。学習机の上の壁につけられた棚に箱や瓶に入った物が多数収納されている。机の上の小さい作り棚にも、細かい人形が飾られている。この写真を選択した児童はいなかった。また、No.13、No.12（選択数 各1）も、ともに子供部屋である。No.13は、中央にドラムセットがあり、正面の壁には多数の書籍が収納されており、フィギュアなどの装飾品も棚に飾られている。No.12は、壁紙は黄色で、おもちゃ、本、写真、バックなどが壁につけられた棚に収納されており、ぬいぐるみも多数飾られている部屋である。これらの結果から、装飾も含め物が多く見える部屋は児童にとって居心地がよいと感じられないことが傾向として明らかとなった。

授業ではこの後、児童が住まい方カードの中で好きだと選択したカードとその理由を伝え合った。自分と同じカードを選んだ児童の発言には、大きく頷きながら聞き入る児童の様子も見られた。多くのカードとその理由が出そろったところで、児童が好きだとした理由を大きく「気持ちがいい」「リラックス」「快適」にまとめた。そして、これらを実現する生活を送るためにこれから家庭科では、住まいについて「整理・整頓」「清掃」「寒い季節を快適に過ごす方法」「暑い季節を快適に過ごす方法」を学ぶことを伝え、教科書を見ながらこれからの学習内容を確かめた。

【学習過程4 まとめ】

まとめとして、児童は本時の学習を終えて気づいたことをワークシートに記述した。この結果より、児童の記述内容は大きく「住まいに表れる価値観や個性への気づき」「住まいを整理・整頓する意味への気づき」「自己の好みへの気づき」「住まいの機能や概念への気づき」の4つに大別された。表4は、児童の記述内容を示したものである。

「住まいに表れる価値観や個性への気づき」は、「住まい方」カードを見ることを通して住まい方の多様性に気づいたことや、友達と考えを交流したことからそれらと比較することができたことが書かれていた。「住まいを整理・整頓する意味への気づき」は、「住まい方」カードの写真がどれも整頓されていたことからそれらに憧れをもったこと、住むことと地球環境を関連付けて考えたことが書かれていた。「自己の好みへの気づき」は、「私は」や「ぼくは」「自分は」といった主語から始まるように、改めて自己に気づいたことが驚きをまじえて書かれていた。「住まいの機能や概念への気づき」は、「家は住むだけだと思っていたけど、とても意味があるんだなと思いました。」のように、漠然と捉えていた住まいの機能や概念について学習を通して気づきはじめたことが書かれていた。

3. 本実践のまとめ

本実践を通して、児童が住まいにおける「快適」をどのように捉えているのかが明らかとなった。「感覚マーク」については、「リビング」では「心で感じるマーク」が突出して多いことから、家族

表4 本時の学習を終えて気付いたこと

住まいに表れる価値観や個性への気づき
<ul style="list-style-type: none"> ●みんな選んだカードがばらばらで一人一人選んだカードにちゃんと理由があって、洋風が好きな人もいれば和風が好きな人もいておもしろいなと思いました。 ●住まい方カードには、いろいろ個性のちがうカードがあつておもしろい。
住まいを整理・整頓する意味への気づき
<ul style="list-style-type: none"> ●家の写真（住まい方カード）はきれいだったので、このあと整理整頓につながると思います。 ●居心地の良い家に住むためには地球を大切にすればいいのかなと思いました。
自己の好みへの気づき
<ul style="list-style-type: none"> ●（自分は）せまくてコンパクトですずしい場所が気に入っている。 ●自分は和風なところが気に入っているような気がする。 ●私は「居心地のいい家」について考えてみると、落ち着くところや、広々しているところ、物が少ないところが居心地の良い家なのかなと思いました。
住まいの機能や概念への気づき
<ul style="list-style-type: none"> ●部屋は人がリラックスできる所なんだと気づきました。 ●住むためには「リラックス」が必要なんだと感じた。 ●家は住むだけだと思っていただけ、とても意味があるんだなと思いました。

とのつながりや家庭の団欒から得る心理的な安らぎを「快適」と感じていると考えられる。このような情意的な感情について、児童の発達段階を鑑みて丁寧に授業の中で扱う必要があるものと考えられる。また、「寝室」では「肌で触れるマーク」が多いことから、触感による心地よさも「快適」につながるものといえる。よって、住居の学習においても、五感を駆使した学習活動の有効性が示唆される。一方で、プレ思春期を迎えている児童が自分一人の空間に居心地のよさを求めていることも明らかとなった。その面からも住まいの機能について、児童の興味・関心を引き出すことができるようになる。

また、児童が選んだ「住まい方カード」から、児童は日頃の日常に近い空間よりも、秩序立っているものや明るいものに憧れていることが明らかとなった。奥行き感のあるものや、窓からの景色もよさそうな明るく開放的なものを選んでいることから、5年生ながら空間に美意識を求めていることも示唆された。美しいものと居心地のよさを関連付け「快適」を考えていく指導法の開発につながるものと考えられる。

ワークシート上の、学習のまとめの記述では、「住まい方カード」の比較から児童は自分の好みを再確認したこと、友達との比較から住まいの好みの多様性に気付いたことが示された。「住まい方カード」は、これまで共有しにくかった住まいの多様性を教室内で共有することのできる資料として、価値観を考えるという学習の効果が期待できる。そしてこの経験が、住生活学習を自分に引き寄せて学ぶことにつながっていくものと考えられる。

4. 実践の成果と今後の課題

住まいのお気に入りの場所探しで活用した「感覚マーク」は児童が親しみやすく、住居の学習で「快適」を考えるには活用しやすいことが明らかとなった。一方で本実践では、「感覚マーク」を住居学習のキーワードである「快適」に明確につなげるための指導法に課題が残った。今後は

児童が選んだ「感覚マーク」の提示方法について改善を図り、住まいにおける「快適」とは何かを児童が明確に理解できるようにする必要がある。

様々な住まい方に触れるための「住まい方カード」の活用から、児童自身が住まい方の何に自分が関心を抱いているのかに気付くことができる道具としての可能性が示唆された。これは児童が自己理解を深めた姿といえ、学習成果の1つとして重要なものとする。今後は、カードにする写真の選定に改善が必要である。選定には、児童にとりより身近なものがよいのか、住まいへの憧れを喚起するために洗練されたものがよいのかなど、今後さらに研究を進める必要がある。

また、「住まい方カード」を用いた学習からは、「落ち着いている」「気持ちよさそう」という理由から和室を好む児童がいることも明らかとなった。このことは新学習指導要領に記された生活文化に関わるものとして、日本の伝統的な住まいである和室を扱う授業構成に示唆を与えるものといえよう。

引用・参考文献

- 1) 日本建築学会建築経済委員会：『住まいの地域性と住教育』，1998年度日本建築学会大会（九州）建築経済部門パネルディスカッション資料，1998.9
- 2) 関川 華、小橋花奈子：家庭科住居領域における学習内容の構成とその体系的再編に関する研究，日本建築学会計画系論文集 第80巻 第710号，pp991-998，2015
- 3) 文部科学省：新学習指導要領（平成29年3月公示）（www.mext.go.jp より）
- 4) 文部科学省：小学校学習指導要領解説 家庭編，株式会社東洋館出版社，2008
- 5) 北海道立北方建築総合研究所監修：子どものための住まいとまちの体験学習プログラム集『ただいま』北海道建設部建築指導課，2001
- 6) ヘレン・ピアス作 まつおか きょうこ訳：『ねずみのいえさがし』，精興社，1984
- 7) 速水多佳子、関川千尋：学校教育における住居領域の教育システムの有効性について，日本家政学会誌，第51巻 第4号，pp317-330，2000
- 8) 日本住宅総合センター：「住教育の推進方策と住教育ガイドラインに関する検討調査」，日本住宅総合センター，2008
- 9) 宮崎陽子、多治見左近：家庭科住居領域における学習内容の構造に関する試行的研究—大学生の高校までの住居領域学習志向の分析—，日本建築学会計画系論文集、第77巻 第674号，pp873-880，2012.4

(2017年10月31日提出)

(2017年11月18日受理)

Attempted Procedures taken for Housing Guidance Classes on Residential Life Studies in Elementary School Home Economics

Yamashita, Ayako

Sayamadai Elementary School, Sayama City Saitama

Kamesaki, Minae

Faculty of Education, Saitama University

Abstract

The research reports on the classes that were conducted at the start of the studies on residence life in elementary school home economics that were designed to help children figure out the characteristics of homes. First of all, children were asked to look for favorite places in their homes. Through the process of trying to find out why they chose those particular places, they were able to start realizing the comfort of their homes.

In the process, sensory marks indicating sight, hearing, smell, touch and mind were used to help them become more conscious of their various feelings.

Furthermore, children were made to choose photo cards of their choice for living rooms, Japanese style rooms, children's rooms, etc., think about the reason for their choice, and discuss it in groups. This was aimed to be a momentum for them to think about comfortable living and housing.

The results obtained from the research are as follows.

1. From the choice of favorite places, the reasons, and the sensory marks the children entered on the worksheets, it can be said that there is a tendency to view the living room as a place of family communication and enjoyment, and the bedroom as a place to gain comfort from the touch of their skin. While favorite space for each child is diverse and is accompanied by various feelings, it is apparent from the high appearance rate of the feeling marks (heart) that comfort is gained fundamentally from feelings of calmness and relaxation.

2. From the choice of housing cards and the reasons they described, it became clear that the fact that children thought about comfortable living led to their motivation for future learning. It was also found that children realized that they each had their own preference for style, and that their personalities and values were reflected in their taste. From this result, it was suggested that this particular attempt could be an effective procedure for the introduction of housing life studies.

Keywords: sensory marks, housing cards, housing life study, Elementary School Home Economics